

機関番号：13201
 研究種目：研究活動スタート支援
 研究期間：2009～2010
 課題番号：21830044
 研究課題名(和文) 保育者志望学生の描画指導力と幼児の創造力を育成する見立て描画プロジェクトの展開
 研究課題名(英文) The project of “as if” drawings :The aims of developing art educational skills of the college students in the course of early childhood education and preschool children’s creativity
 研究代表者 若山育代 (WAKAYAMA IKUYO)
 富山大学人間発達科学部 講師
 研究者番号：90553115

研究成果の概要(和文)：本研究では、インタラクシオンデザイン分野で一般的に用いられているペルソナ/シナリオ法(以下、P/S法)を用いて学生が見立て描画指導案を作成することで、学生の、幼児の目線に立って指導案を作成する態度、志向及び見立て描画指導力を育成することを目的とした。また、見立て描画活動を通して、幼児の創造力を育成することも目的とした。具体的には、通年のプロジェクト学習を通して、学生は仮想の幼児であるペルソナと、そのペルソナが見立て描画中にどのような行動をとるかを予想したシナリオ、そして、そのペルソナとシナリオに基づいた見立て描画指導案をグループで作成した。さらに、作成した見立て描画指導案をもとに幼稚園で見立て描画実践を行った。その結果、P/S法を用いて見立て描画指導案を作成し、実践した経験は、幼児の目線に立って描画指導案を作成する学生の態度、志向及び見立て描画指導力を向上させることが明らかになった。さらに、学生が実践した見立て描画活動下では、幼児が創造的に見立て描画活動を行うことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study were to develop art educational skills of the college students in the course of early childhood education, and preschool children’s creativity through “as if” drawing activities. The students made the teaching plans of “as if” drawing activity using Persona/ Scenario method. Today, commercial artists use the Persona/ Scenario method to produce user-centered design. The findings were that (1) the students acquired higher art educational skills through experiences that made the teaching plans of “as if” drawing using Persona/ Scenario method. (2)Preschool children showed creativities in “as if” drawing activities when the college students carried out their teaching plans in preschools.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	670,000円	201,000円	871,000円
2010年度	350,000円	105,000円	455,000円
年度			
年度			
年度			
総計			

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：保育者志望学生 ペルソナ/シナリオ法 幼児 見立て描画

1. 研究開始当初の背景

保育指導案には、「子どもの姿」や「予想される活動」等、幼児の姿を具体的に記述する項目がある。これらの項目は、幼児の日頃

の活動を観察した上で書かれる内容であるために、座学が中心で幼児と触れ合う経験が少ない学生には記述することが難しい(権藤, 2007)。そのため、大学の講義で描画指導案

を作成する場合、一般的には、これらの項目については、幼児造形教育テキストにある幼児の描画表現の発達特徴や事例を引用して記述させることが多い。

しかし、このようにテキストの記述を引用するだけでは、学生はテキストの文章を読み書きするだけで、幼児の具体的なイメージを持たないまま描画指導案を作成することになる。本来、指導案は、幼児の具体的な姿や行動を描写するシナリオとして作成されるべきだが(葉山, 2001), 大学に通う学生は、生き生きと目に浮かぶ幼児の姿を思い浮かべて描画指導案を書くことが難しい(権藤, 2007; 照沼, 1999)。

ところで現在、日々幼児と関わる保育者でさえも、幼児の姿を踏まえない保育者中心のマニュアル描画指導案を作成することや描画指導力が低下していることが報告されている(高橋, 2000)。作品の見栄えを重視するマニュアル描画指導は、子どもの主体的な学びを促さないと恐れ問題視されているだけでなく(Krajick & Blumenfeld, 2006), 「見本どおりにきれいに描きたい」と考え、絵を描くことに苦手意識を持つ年長児を増加させる一因とみなされている(小田・高橋, 2005)。こうした現状からも、学生の頃から、幼児の姿を具体的にイメージし、その姿を踏まえた描画指導案を作成するスキルと態度、及び描画指導力を獲得しておく必要がある。

しかし、上述した通り、目の前に幼児がいない学生にとっては、幼児の姿を生き生きとイメージし、幼児の姿を踏まえた指導案を作成することは難しい。そこで、本研究では、こうした課題を解決するために、インタラクティブデザイン分野で一般的に用いられているペルソナ/シナリオ法(Cooper, 1999)(以下、P/S法と呼ぶ)を用いる。

この手法は、デザイナーがユーザの姿をイメージしながら製品をデザインし、ユーザ中心のデザインを実現するために用いられるものである。デザイナーは、企業データに基づき、名前、年齢、性別、趣味、性格、家族構成に至るまで詳細に設定した「ペルソナ」という架空のユーザと「シナリオ」を作成する。「シナリオ」とは、ペルソナのある状況における行動を、①他者とのコミュニケーション、②行動の時系列、③作成する人工物、④社会的環境、⑤物理的環境という5つの観点から描写したものである。

このP/S法を用いることによって、学生は、ペルソナと自分が本当に触れ合ったような感覚を持ち、作成したペルソナならではの活動や、ペルソナのためのねらい、環境設定等をイメージすることができるようになると思われる。

ところで、上述したように、現在、「見本どおりにきれいに描きたい」と考えて、絵を

描くことに苦手意識を持つ年長児が増加していることが報告されている。こうした年長児には、絵離れを進行させないために、塗りたくり等の絵の具遊びから見立てへと発展させるような、身体的・感覚的に描くことができる見立て描画活動が適している(片山, 2001; 中原, 2001)。なお、この見立て描画は、海外では幼児の創造力を育成する活動として重要視されており(Malaguzzi, 1996), 教育的意義のある活動として注目されている。

2. 研究の目的

以上の背景から、本研究では、次の3点を目的とした。

(1) P/S法を用いた保育者志望学生の見立て描画指導案作成スキルと態度の育成、(2) 学生がP/S法で計画した見立て描画指導案の実践・省察を通じた学生の描画指導力の育成、

(3) 見立て描画活動を通じた幼児の創造力の育成、である。

3. 研究の方法

< (1) P/S法を用いた保育者志望学生の見立て描画指導案作成スキルと態度の育成及び(2) 学生がP/S法で計画した見立て描画指導案の実践・省察を通じた学生の描画指導力の育成について >

ここでは、P/S法を用いた保育者志望学生の見立て描画指導案作成スキルと態度として、具体的に、学生の、子どもの目線に立って見立て描画指導案を作成する態度とスキルに焦点を当てた。

1) 実践の概要と参加者

本実践は、T大学で後期に開講される「保育内容(造形表現)」にて行われた。この「保育内容(造形表現)」の授業は、T大学における幼稚園教諭普通免許及び保育士資格取得のための科目である。

こうした授業科目の特性上、この授業を受講した学生のほとんどは、将来、保育者になることを志望している学生であった。受講者数は、2年生が10名、3年生が18名の合計28名であり、全員が女性であった。

なお、この授業を受講した2年生は、夏季休業中にF幼稚園にて初めての幼稚園実習を終えている。一方、3年生は、F幼稚園及びその他の富山県内幼稚園及び保育所等での実習を終えている。さらに、彼女たちは2年生の前期に「保育の指導法」という指導案作成に関する講義を受講し、指導案の書き方や指導案をなぜ作成する必要があるのかといった原理についての指導を受けている。加えて、実習先では何度も指導案を作成している。そのため、目的部でも述べたように、彼女たちは指導案作成についてのメタ的知識はすでに十分に持っている状態であった。

授業は、2009年10月16日から合計13回の授業を、PDCAサイクルに基づいて<第1セ

ット>と<第2セット>に分割した。各セットは、次の通りである。<第1セット> 第1回～第5回授業：ペルソナ、シナリオ、指導案の作成。第6回授業：実践1。第7回・8回授業：実践1の振り返り。<第2セット>第9回～第12回授業：ペルソナ、シナリオ、指導案の作成。第13回授業：実践2。第14・15回授業：実践2の振り返りである。

2) 本実践における見立て描画活動

上述したように、本授業では、見立て描画活動を取り上げた。具体的には、協力幼稚園で行った第1回目の実践では、落ち葉を使用して見立て絵を描く活動を行い、第2回目の実践ではスタンプングによって出来た形から見立て絵を描く活動を行った。

これらの活動を取り上げたため、学生は、第1セット、第2セットともに模擬練習を行い、自分たちでも実際に落ち葉を使った見立て描画と、スタンプングによる見立て描画を制作する経験を持った。それらの経験を活かし、ペルソナ及びシナリオを踏まえたうえで指導案を作成した。

3) 実践の評価方法

本実践を通して、学生の、子どもの目線に立って見立て描画指導案を作成する態度が育ったかどうかを評価するため、次の3つの手法を用いた。すなわち、①全員を対象とした自由記述式アンケートと②各グループの代表者1名に対する個別インタビュー、③保育実践力評価スタンダードへの回答である。

自由記述式アンケートについては、学生に「ペルソナ/シナリオ法を用いて見立て描画指導案を作成し、その指導案を実践したことで自身の描画指導力が向上したと思うか」と尋ね、理由とともに自由に回答させた。個別インタビューについては、次に述べるあらかじめ用意しておいた3つの質問項目を尋ね、その他、学生に自由に語らせたり、こちらが興味を持った点について深く尋ねたりした。

個別インタビューの項目は、①ペルソナ/シナリオ法で指導案を書いたことについてのどのような印象を持っているか、②指導案の『子どもの姿』『ねらい』『活動内容』『時間』『子どもの活動』『指導上の留意点』『環境設定』『言葉かけ』を書く際、ペルソナ/シナリオ法を用いたことでどのようなメリットとデメリットがあったか、③今後、指導案を書くときに、ペルソナ/シナリオ法で経験したことを心がけたりそれを再度用いたりして指導案を書こうと思うかどうか、であった。これらのアンケートとインタビューを行うことによって、学生が自身の描画指導力が向上したと感じた理由の中に、子どもの目線に立って指導案を作成したためという理由が含まれるかどうかを知ることとした。

加えて、学生の見立て描画指導力が向上したかどうかを調べるために、保育実践力評価

スタンダード（鳴門教育大学戦略的教育研究開発室、2006）を見立て描画指導場面用に修正し、使用した。保育実践力評価スタンダードは全39項目からなり、すべての項目について、5件法で学生に回答させた。

なお、保育実践力評価スタンダードについては、実践1後と実践2後に受講生に回答させ、自由記述式アンケートと個別インタビューについては実践2後にのみ行なった。

< (3) 見立て描画活動を通じた幼児の創造力の育成について >

1) 参加児と時期 T県内の国公立幼稚園の年長児クラス(22名)を対象とした。観察した実践は、2009年11月と2010年1月に行なわれた見立て描画活動である。

2) 分析材料と分析手続き 11月と1月の実践で、参加児たちの活動をビデオに記録した。参加児の行動を書き起こし、楨(2002)の幼児の造形表現スタイルの分類を参考にして、見立て描画行動を分類した。

4. 研究成果

< (1) P/S法を用いた保育者志望学生の描画指導案作成スキルと態度の育成及び(2) 学生がP/S法で計画した見立て描画指導案の実践・省察を通じた学生の描画指導力の育成について >

自由記述式アンケートに回答した27名中、20名がペルソナ/シナリオ法によって自身の描画指導力が向上したと感じていた。そこで、筆者を含む2名によって、受講者がなぜ自身の見立て描画指導力が向上したと感じたのか、その理由を分類した。

その結果、向上したと感じられた理由は、次に述べる2つに分かれた。一つ目は、「子どもの思いや感情に寄り添って指導案を作成できるようになったため」(12名)、「その子にあった手立てを考えられるようになったため」(8名)であった。以下に、受講生の回答例を表1に示す。

表1 記述式アンケートへのA子の回答

ペルソナを考える段階で、“こういう子は、こういう時にこんなことを言うよね。”などと考えると同時に、“どうしてこういう風に言うんだろうね？この時どんな気持ちなんだろう？”と考えました。ペルソナ/シナリオ法は、実際に支援したい子どもの立場になって、じっくりと気持ちを考えるきっかけにもなりました。こういった作業を続けることが、子どもの気持ちに寄り添った支援を行うことにつながるのかなと思いました。

次に、各グループの代表者1名、合計5名への個別インタビューからは、学生が、ペルソナ/シナリオ法を用いて見立て描画指導案を作成したことで、子どもの姿を具体的に頭の中にイメージして、ねらいや環境設定、導

入の言葉かけなどを工夫できた様子がわかる。表2に、学生の回答例を示す。

表2 記述式アンケートへのB子の回答

—ペルソナ/シナリオ法で指導案を書いたことについてどのような印象を持っていますか？

「対象を考えやすかったっていうのもあったし、実習でやってた時より子どもの姿が具体的に頭の中にイメージできて、こういう声掛けしたらこういうペルソナの子だったらこういう反応するかなっていうのを、実習の時の指導案とかは全然そういうことを考えずに全体を見た感じでやってたから、ペルソナシナリオ法の時は、一人の子のことを考えてっていう感じだったから、なんか難しかったです」

—それは、指導案の言葉かけのところを考えるのが難しかったっていうことですか？

「はい、その子の反応とかも考えたじゃないですか、ペルソナシナリオ法だと。この子だったらどういふ反応が返ってくるかなって一人に限定してっていうのがすごく難しかったです。」
—では、『子どもの姿』『ねらい』『活動内容』『時間』『子どもの活動』『指導上の留意点』『環境設定』『言葉かけ』の姿を書くときにペルソナ/シナリオ法を使ったことにはどのようなメリット・デメリットがあったと思いますか？

「いつも書くときは全体をみて、みんなこんな風にしてたな〜とかいう感じで、けど、ペルソナ/シナリオ法だったら、この子どんなことしとったかなっていう感じで、その子の姿をちゃんと頭の中でイメージしておかなきゃ書けなくて、でも、前やった時のその子の姿がちゃんとみれていなかったりもして思い出したりするのとかもすごく大変だったし・・なんていうか全体の姿を書くのは簡単なんだけどその子一人のことを思い出して書くのは大変だったから、そういうところは難しかったなと思いました。」
—では、指導案の他の項目を書くときのメリット・デメリットを教えてください

「えーと、言葉かけとか指導上の留意点とか書くときも、一人の子のことを想定しているからスムーズに出てくるっていうか、こういうことに注意しておけばこの子に対してはスムーズに行くなっているのがすごい考えやすかったなって思うし・・・」

—デメリットは何がありますか？

「やっぱりその子のためだけの言葉かけとか留意点になってしまったり、この授業でやりたいに何人も保育者がいたらいいと思うけど、本当の保育の場面では、他の子にまで目が行き届かなくなってしまうかなって思いました。」

—これからどのような場面でペルソナ/シナリオ法を使いたいと思いますか？

「やっぱり設定保育じゃない時に自由保育の時に使いたいと思うし、気になる子とかいるじゃないですか、そういう子にこういう力が伸びてほしいとかそういう風に思ったときに使いたいなと思います。」

以上の記述式アンケート及びインタビューの結果をまとめると、本授業を受講したことで、子どもの目線にたち、子どもが何を考えたり感じたりしているのかを想像した上で、学生がその子どもの姿に応じたきめ細かい指導を行おうとしている様子がわかる。このことから、ペルソナ/シナリオ法を用いたことによって、学生の、子どもの目線に立って見立て描画指導案を作成しようとする態度が育成されたといえる。

次に、学生の見立て描画指導力が向上したかどうかを調べるために、図1に示す見立て描画指導用に修正した保育実践力評価スタンダード得点について、2（時期：実践1後と実践2後）×3（描画指導力の段階：段階1～段階3）の分散分析を行った。なお、描画指導力の3つの段階については、段階が上がるごとに、より高度な見立て描画指導力を獲得したことを示すようになっていた。

その結果、時期と描画指導力の段階間の交互作用が有意であった ($F(2, 36) = 3.96, p < .05$)。そのため、時期の単純主効果を検定したところ、段階1では有意でなかったが、段階2では5%水準で有意であり ($F(1, 36) = 5.04$)、段階3では1%水準で有意であった ($F(1, 36) = 24.63$)。こうした結果から、実践1後と比べて実践2後になると、学生は、段階2や段階3といったより高度な見立て描画指導力を獲得することが明らかになった。

こうした結果が得られたため、次に、全39項目中、どの項目の得点に実践1後と実践2後で変化が見られるかをt検定により分析した。その結果、「子ども（ペルソナ）の興味や関心に沿った計画を設定できた」 ($t(13) = 2.69, p < .05$)、「導入で子どもの興味を引くような工夫をすることができた」 ($t(13) = 2.88, p < .05$)、「子どもの視線や表情を受け止め、適切に反応を返すことができた」 ($t(13) = 1.79, p < .10$)、「子どもの活動を関心・意欲・態度・思考・判断・技能・表現・知識・理解といった様々な観点から評価している」 ($t(13) = 2.19, p < .05$)、「保育のねらい、計画、保育を通して展開された子どもの活動の実際とを対応させた観点に従って評価した」 ($t(13) = 2.09, p < .10$) の5項目の得点に有意及び有意傾向の差がみられた。

これらの項目は、子どもの目線に立ち、子どもが今どのような状態にあるのかをしっかりと想定した上で保育を行えたかどうかを振り返る項目であったことから、ペルソナ/シナリオ法を用いて指導案を作成し、その指導案を実践する経験によって、受講者の見立て描画指導力は向上したといえる。

< (3) 見立て描画活動を通した幼児の創造力の育成について >

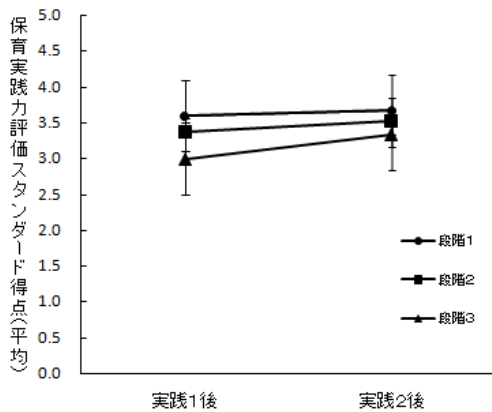


図1 見立て描画指導場面用保育実践力評価スタンダード得点(平均)

表3に示すように、学生が計画、実践した見立て描画実践中に、年長児は、素材に対して「探索する」「壊す」「くるくると回す」「組み合わせる」、という造形行為を行い、さらに、「要素を描き足す」「状況を描いてその中に素材を位置づける」という見立て描画活動を行っていることが明らかになった。また、これらの造形行為と見立て描画活動を通して出来上がった作品からは、年長児が素材を「部分としてとらえて」見立てることと、「全体としてとらえて」見立てる方略を用いていることがうかがえた。

このように、素材の特徴を探索によって知り、素材を壊したり回したりして働きかけることによって、複数の素材を組み合わせるといった造形行為は、創造性研究の知見をふまえば、創造的な思考を働かせていることの現われととらえることができる(ヴィゴツキー, 2002など)。

以上の結果から、本研究を通して、P/S法が保育者志望学生の子どもの目線に立って見立て描画指導案を作成する態度やスキルを育成するだけでなく、幼児の創造力を育む実践を計画することが可能になることが明らかになった。

表3 見立て描画活動中にみられた年長児の見立て描画行動の出現率

素材に対する働きかけ	探索する	20.0
	壊す	6.7
	くるくると回す	13.3
	組み合わせる	60.0
見立て描画活動	要素を描き足す	75.0
	状況を描いてその中に素材を位置づける	25.0
見立て方略	部分としてとらえる(例 まつぼりを人魚のしっぽとして見立てる)	77.8
	全体としてとらえる(例 木の実を「魚の卵」として見立てる)	22.2

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 若山育代 (2011年3月) 自然物を使用した4歳児と5歳児の見立て絵活動の実践研究—他者との関係の中で獲得する素材に対する多様な見方に着目して— 美術教育学, 32, 465-477. (査読有)
- ② 若山育代 (2010年5月) ペルソナ/シナリオ法が保育者志望学生に及ぼす影響—子どもの目線に立って見立て描画指導案作成に向けて— とやま発達福祉学年報, 1, 55-56. (査読無)

〔学会発表〕(計3件)

- ① 若山育代 (2010年3月) ペルソナ/シナリオ法が保育者志望学生の見立て描画指導力に及ぼす影響 第32回美術科教育学会仙台大会
- ② 若山育代 (2010年9月) 見立て描画活動における年長児の見立て描画行動の分類—斉保育場面に着目して— 日本教育心理学会第52回総会
- ③ 若山育代 (2011年3月) ペルソナ/シナリオ法を用いた造形指導案の作成—造形指導案作成中の保育者志望学生の発話に着目して— 第33回美術科教育学会富山大会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

若山育代 (WAKAYAMA IKUYO)

富山大学人間発達科学部・講師

研究者番号: 90553115

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: